

最後の長崎英国領事



若い頃のフェルディナンド・C・グレートレックス（筆者蔵）



雲仙スミレ（筆者蔵）

植物学の分野でも名を残す

長崎英国領事に着任した際、フェルディナンド・C・グレートレックスは、幕末の開国以来続くこのポストの最後を飾ることになるとは、おそら

領事館閉鎖という困難な任務を監督する役割を担った。次の赴任地は北海道の函館であり、そこでも領事館を横浜英国領事館の支所へ格下げする任

ける業務量は外交官の常駐を必要とするほど十分ではない」ためであった。グレートレックス領事は、九州全域を含む長崎管区の状況を詳細に説明

く船を離れない船長のよ
うに、机の前に座り続け
ていた。日本兵が大浦の
領事館を包囲し、領事夫
妻を自宅軟禁下に置い
た。

朝鮮、フィリピンの各港で補佐官や副領事を務めた。

下関の領事代理に任命された彼は、大正11（1922）年に同地の英国

日英大使はグレート
ックス領事に対し、同領
事館の閉鎖に関する意見
を提出するよう要請し
た。その理由は「外務省
の見解として、長崎にお

崎における現状維持を決定した。その結果、昭和16（1941）年12月8日に太平洋戦争勃発の報が長崎に届く際、グレー・トレックス領事は沈みゆ

18歳で日本領事部の試験に合格し、東京で学生通訳としてキャリアをスタートさせた。その後数年间で昇進を重ね、日本、

昭和6（1931）年秋、英国外務省は長崎領事館の閉鎖案も提示。駐

唆されただけで、函館や下関の場合よりもはるかに大きな抗議の声が上がることは間違いない」と指摘した。

結局、英国外務省は長

の長崎英国領事館

務が彼の肩にかかった。
昭和2（1927）年、
台湾における淡水英国領
事への栄転が発表されて

答した。彼は長崎英国領事館の閉鎖に反対し、「日本のあらゆる階層がこの地の外国との歴史的関わりを大いに重視しており、われわれの撤退が示

に収容された。翌年夏、ようやく長崎を離れることを許され、横浜で交換船に乗り込み、イギリスへの帰国を果たした。夫妻は2度と日本に戻るこ

はあまり知られていないものの、彼が日本領事部での長いキャリアと並行して取り組んだ植物学の分野で今なお生きている。シーボルトが日本人妻・

その後、2人は長崎郊外の学校に、数名の宣教師、日本人妻を持つ高齡者やその他の敵国人と共に

とはなく、長崎英国領事館も戦後復活することはなかった。

グレートレックスの名



昭和12 (1937) 年
領事館 (右の建物)

《誰可許你合同家鄉》
昭和12.1.25



に発行された絵葉書に
。カラー加工（筆者）

Central street and Ours Seashore, NAGASAKI.
(火) 市通館都領岸海通火 (兩名崎長)



見る長崎英国
(蔵)

月1回掲載します

(グラバー園名誉園長)